
3. まとめ

3-1. まとめ

3-1-1. 調査対象の医療機関について

- 調査対象医療機関のうち、診療所の87%の医師、および病院の13%の医師から回答を得た。
- 調査票に記入した医師の年齢は、30歳代が1%、40歳代が10%、50歳代が25%、60歳代が26%、70歳以上が10%の割合であった。20歳代の医師が記入した調査票はなかった。また、年齢の記入が行われていない回答が29%あった。

3-1-2. 在宅医療の状況及び取組み意向

- 回答を得た診療所・病院397件のうち、訪問診療を実施している診療所・病院は38%、実施していない診療所・病院は62%であった。訪問診療を実施している診療所・病院の割合は、大館・鹿角医療圏が21%と最も少なく、北秋田、大仙・仙北、湯沢・雄勝の3つの医療圏が50%で最も多い。
- 能代・山本医療圏では、訪問診療を実施している病院の割合が75%で、医療圏のなかで最も高かった。北秋田、湯沢・雄勝の両医療圏では、訪問診療を実施している病院は0件であるが、訪問診療を実施している診療所の割合はそれぞれ58%と56%で、医療圏のなかで最も多かった。
- 訪問診療を行っていない医療機関の今後の取組み意向をみると、取組む意向があり実施する予定があるとの回答は4%であった。その理由として、「訪問診療を必要とする患者が今後増加すると思われるから」を挙げた回答の割合が56%と最も高かった。一方、訪問診療へ取組む意向がない理由には、現行業務で手一杯であることのほか、24時間365日対応の負担を挙げた回答が多かった。
- 在宅医療が発展するために必要と思われることとして、訪問診療の実施の有無にかかわらず「診療報酬などの調整」と回答した割合が最も多い。訪問診療を実施している医療機関では、「看護師による一時的対応の充実」「在宅医療に対する住民の理解を深めるための啓発活動」「市町村による体制整備」が上位に上り、「在宅医療に対する住民の理解を深めるための啓発活動」を選んだ割合は、訪問診療を実施していない医療機関との間で差が最も大きかった。

3-1. まとめ

3-1-3. 在宅医療の提供状況の詳細について

- ❑ 秋田周辺、大仙・仙北、横手の各医療圏は、年間の平均訪問患者数、年間の平均看取り患者数ともに全医療圏の平均を上回った。ただし、秋田周辺医療圏は、平均訪問患者数200人/年および平均看取り患者数90人/年の訪問診療を行っている医療機関を含む。これを除いた場合、秋田周辺医療圏の年間の平均訪問患者数は184.8人、年間の平均看取り患者数は2.4人となり、全医療圏の平均を下回る。
- ❑ 医療機関の1ヶ月あたりの往診患者数では、「0人」または「1人～10人未満」である割合が全ての医療圏で80%以上。一方秋田周辺医療圏では1ヶ月あたり50人以上と回答した。
- ❑ 1年あたりの看取り患者数は、北秋田医療圏の全ての医療機関が年間1人以上の看取りを行っているのに対し、大館・鹿角医療圏では「0人」の回答が67%を占めるなど医療圏によって差が生じた。
- ❑ 在宅患者の主な疾患は、全医療圏で脳血管疾患(腫瘍以外)の割合が最も多い。特に、脳血管疾患(腫瘍以外)を主な疾患とする患者の割合を医療圏毎に調べると、大館・鹿角および横手の両医療圏でそのような患者の割合が80%以上を占める医療機関が、それぞれ17%および13%あり、他の医療圏に比べて多い。
- ❑ 回答した医療機関の91%が自宅療養患者を訪問診療しており、1ヵ月あたりの平均訪問患者数は8.4人で他の施設に比べて多い。ショートステイを訪問する医療機関は、訪問診療を行っている医療機関の30%を占め自宅に次いで多い。有料老人ホームを訪問する医療機関は全体の15%であるが、1ヵ月の平均訪問患者数は2.0人で比較的多い。
- ❑ 自宅で看取りを行っている医療機関が全体の50%の割合を占めた。ショートステイ、グループホーム等の施設で看取りを行っている医療機関もあるが、いずれも年間の看取り患者数の全医療圏平均は1人に満たない。
- ❑ 訪問診療を行っている医師の年齢は、どの医療圏でも50歳代、60歳代、70歳以上が多数を占め、20歳代、30歳代、40歳代の医師は少数であった。大館・鹿角、能代・山本医療圏では他の医療圏に比べて70歳以上の医師が多く、特に在宅医の高齢化が進んでいる。横手医療圏は、他の医療圏に比べ、比較的若手の訪問診療医が多く、20歳代が4%、30歳代が18%の割合を占めた。

3-1. まとめ

- ❑ 訪問診療を実施する際に連携している職種の人数を尋ね、それらの職種の人数の医療機関毎の合計について医療圏毎に平均を求めた。通常の訪問診療の際の看護師との連携は、どの医療圏でも多い。
- ❑ 回答した医療機関の6%が、新たに在宅療養支援診療所や在宅療養支援病院として「申請する予定がある」と回答した。
- ❑ 訪問診療を行う上で負担となっている事柄のなかで、「24時間365日の対応」「連携機関との連絡調整」「入院時のベットの確保」「訪問診療を行う医師の採用」が、病院と診療所で負担感に差が生じた。
- ❑ 現在訪問診療を実施している医療機関の37%が、10年後に訪問診療を「止めている」と回答。その理由に訪問診療を行う「後継者がいない」を挙げた医療機関が、「止めている」医療機関の53%で最多。一方、10年後に訪問診療を実施している医療機関のうち「拡大している」と答えた医療機関が10%を占めた。その理由には「現在の患者からの希望があるから」他、患者のニーズを理由とするものが上位に挙がった。
- ❑ 新規の開業を考慮しなければ、10年後に訪問診療を実施する医療機関は現在の151施設から94施設へ減少する。一方、現在訪問診療を実施している医療機関の58%が、10年後、在宅医療を必要とする患者が増加すると見ている。
- ❑ 10年後に訪問診療を実施していない医療機関では、60歳代や70歳以上の医師の割合が多かった。
- ❑ 訪問診療の際に移動に用いる交通手段は、医療機関の97%が自動車と回答した。医療機関から訪問可能な患者宅までの平均的な移動時間は、10分程度～15分程度の場合が多い。平均的な移動距離では、北秋田医療圏が10.1Km、秋田周辺医療圏が5.8Kmなどで、医療圏の間で差が生じた。
- ❑ 積雪期に移動時間に変化があると答えた医療機関107件に対し、積雪期以外の移動時間が、積雪期に何倍に増えるかを実数で尋ねた結果、1.5倍～2.5倍未満の範囲に入る回答が多かった。
- ❑ 積雪期の訪問診療で医師が負担と感じている事柄について尋ねた。全ての医療圏で、「特になし」を選んだ医療機関よりも、負担に感じている事柄を選んだ医療機関の方が多かった。

3-1. まとめ

- ❑ 自医療機関から患者宅まで、平均的な移動時間を大幅に超える時間をかけて訪問している患者の有無について調べたところ、いずれの医療圏でもそうした患者を有する医療機関があった。
- ❑ 積雪期における訪問先患者数の増減については、「増加する」または「減少する」と答えた医療機関の合計は得られた回答の19%にあたり、積雪は訪問診療を受ける患者の一部の動向に影響を与えている可能性がある。

3-1-4. 在宅医療関連施設との連携について

- ❑ 「地域の同職種間で情報交換や話し合いの機会が不足」「多職種間で患者について情報交換や話し合いの機会が不足」など多職種間でのコミュニケーション不足や、「医療職と介護職間で専門性やその限界について理解が不足」「介護側は、医療に関する知識が不足」など、互いの専門領域に対する理解不足を課題に挙げた回答が多かった。病院からの回答では、多職種との連携を課題として挙げた医療機関の方が、同職種との連携を課題として挙げた医療機関よりも多かった。
- ❑ 診療所および病院が、他の在宅医療関連施設との情報連携に用いる媒体を調べた。大館・鹿角医療圏では、対面による連携が65%を超えたのに対して、能代・山本、由利本荘・にかほ医療圏では、電話による連携が半数を超えており、医療圏の間で主に使用される媒体に違いが見られる。Eメールおよびシステムを使った連携の回数は、どの医療圏でも、電話およびFAXによる連携回数より少なかった。
- ❑ 診療所が、他の医療機関との連携に比べて薬局や介護施設との連携を積極的に行っているのに対して、病院は、他診療所・病院や居宅介護支援事業所と頻繁に連携しており、訪問看護ステーションとの連携も他の在宅医療関連施設に比べて頻繁である。
- ❑ 訪問看護ステーションと連携している診療所・病院が、訪問看護ステーションとの連携において求めることについて調べたところ、「情報共有(将来的にはICTも含めて)」が58%の割合で最も多く、次いで「24時間の訪問看護対応」が53%の割合で多かった。

3-2. まとめ（医療圏別）

3-2-1 大館・鹿角医療圏

- ❑ 訪問診療を実施している診療所・病院の割合は、21%と医療圏の中で最も少ない。
- ❑ 1年あたりの看取り患者数が「0人」と回答した医療機関が67%を占めた。
- ❑ 訪問診療を行っている医師の年齢は、70歳以上の医師の割合が23%で他の医療圏に比べて多く、在宅医の高齢化が進んでいる。
- ❑ 脳血管疾患(腫瘍以外)を主な疾患とする患者の割合が80%以上を占める医療機関が17%あり、他の医療圏に比べて多い。
- ❑ 通常の訪問診療の際に連携するPT/OT/STの人数の割合が10%を占め、他の医療圏に比べて多い。
- ❑ 診療所および病院が、他の在宅医療関連施設との情報連携に用いる媒体を調べたところ、対面による連携が65%を超えた。電話による連携は19%、FAXによる連携は9%で、Eメールやシステムを使った連携は0%であった。

3-2-2 北秋田医療圏

- ❑ 訪問診療を実施している診療所・病院の割合は50%で、医療圏のなかで最も多い。
- ❑ 訪問診療を実施している病院は0件である一方、訪問診療を実施している診療所の割合は58%で医療圏のなかで最も多い。
- ❑ 通常の訪問診療の際に連携する職種の人数は平均2.2人で、医療圏の中で最も少ない。また、連携する職種も、医師と看護師に限られる。
- ❑ 1ヶ月間の訪問患者数が10人未満である割合が71%を占め、1ヶ月の平均訪問患者数9.1人に対し1ヶ月の訪問診療回数が9.3回であった。平均訪問患者数は全医療圏平均以下であるが平均看取り患者数は全医療圏平均を上回った。回答を得た全ての医療機関で、年間1人以上の看取りを行っていた。
- ❑ 平均的な移動距離では、北秋田医療圏が10.1Kmで、医療圏の中で最も長い。

3-2. まとめ（医療圏別）

3-2-3 能代・山本医療圏

- ❑ 訪問診療を実施している病院の割合が75%で、医療圏のなかで最も多い。
- ❑ グループホームへ訪問している医療機関の割合が60%を占め、医療圏のなかで最も多い。
- ❑ 他の医療圏に比べて60歳代、70歳以上の医師が多く、訪問診療医の高齢化が進んでいる。通常の訪問診療で連携する職種の数2.4人で、北秋田医療圏に次いで医療圏のなかで2番目に少ない。
- ❑ 平均的な移動時間より大幅に移動時間にかかる患者がいる医療機関の割合が27%で、医療圏で最も少ない。
- ❑ 電話による連携の比率が51%を占め、医療圏のなかで最も多い。Eメールやシステムを使った連携は0%であった。

3-2-4 秋田周辺医療圏

- ❑ 訪問診療を実施している医療機関の割合は34%であった。大規模な訪問診療を行う医療機関があり、1ヶ月あたりの訪問診療回数が100回を超える医療機関や、1ヶ月あたり50人以上の往診を行う医療機関があった。また、ショートステイで年間25人以上の看取りを行っている医療機関がある。
- ❑ 年間の平均訪問患者数、年間の平均看取り患者数ともに全医療圏の平均を上回った。ただし、年間の平均訪問患者数200人および年間の平均看取り患者数90人の訪問診療を行っている医療機関を含む。これを除いた場合、秋田周辺医療圏の年間の平均訪問患者数は184.8人、年間の平均看取り患者数は2.4人となり、全医療圏の平均を下回る。
- ❑ 訪問診療を行っている患者の主たる疾患を見ると、他の医療圏に比べて、循環器疾患、精神、神経疾患（認知症を除く）、がん疾患で多くの患者を訪問診療している医療機関が多い。
- ❑ 自医療機関から、訪問診療可能な患者宅までの平均的な移動距離を尋ねたところ、得られた回答の平均は5.8Kmとなり、医療圏の中で最も短かった。
- ❑ システムによる連携の割合は3%で、医療圏の中で最も多かった。

3-2. まとめ（医療圏別）

3-2-5 由利本荘・にかほ医療圏

- ❑ 訪問診療を実施している医療機関は44%の割合であった。
- ❑ グループホームへ訪問診療している医療機関の割合が44%で、能代・山本医療圏に次いで多い。
- ❑ 平均訪問患者数、平均看取り患者数共に全医療圏平均に満たない。
- ❑ 通常の訪問診療を行う際に、平均11.7人の職種と連携しており、全ての医療圏の中で最も連携する人数が多い。また、連携するケアマネジャーの人数が連携する職種の人数の45%を占め、ケアマネジャーとの連携が特に活発である。
- ❑ 電話による連携の割合が50%を占めている。Eメールを使った情報連携は1%、システムを使った連携は0%であった。

3-2-6 大仙・仙北医療圏

- ❑ 訪問診療を実施している診療所・病院の割合は、北秋田、湯沢・雄勝医療圏に並んで50%と医療圏のなかで最も多い。
- ❑ 1ヶ月あたりの訪問診療回数が100回を超える医療機関があった。
- ❑ 年間の平均訪問患者数、年間の平均看取り患者数ともに全医療圏平均を上回った。
- ❑ 通常の訪問診療で、連携しているPT/OT/STと人数が13%と、医療圏のなかで最も多い。
- ❑ 自医療機関から患者宅までの平均的な移動時間の幅が、他の医療圏に比べて大きい。平均的な移動距離では、大仙・仙北医療圏が9.5Kmとなり、北秋田医療圏に次いで長い。
- ❑ 電話による連携の割合が49%を占めている。

3-2. まとめ（医療圏別）

3-2-7 横手医療圏

- ❑ 訪問診療を実施している医療機関は47%の割合であった。また、医療機関の1ヶ月あたりの訪問患者数が他の医療圏に比べて多い。
- ❑ 年間の平均訪問患者数、年間の平均看取り患者数ともに全医療圏平均を上回った。
- ❑ 脳血管疾患(腫瘍以外)を主な疾患とする患者の割合が80%以上である医療機関が、13%を占め、他の医療圏に比べて多い。
- ❑ 他の医療圏に比べ若手の訪問診療医が多く、20歳代が4%、30歳代が18%の割合を占めた。
- ❑ 積雪期に「交通環境が悪化して訪問先へ到着できる時間の予測がつかない」と回答した割合が81%で他の医療圏に比べて高く、「特になし」と回答した医療機関が少ない。

3-2-8 湯沢・雄勝医療圏

- ❑ 訪問診療を実施している医療機関の割合は50%で、医療圏のなかで最も多いが、訪問診療を実施しているのは全て診療所であり、病院は0件である。
- ❑ 平均訪問患者数で全医療圏平均を上回るのに対し、平均看取り患者数では全医療圏平均に満たない。
- ❑ 訪問診療を行う施設種別で、自宅の患者を50人以上見ている医療機関の割合が13%で、医療圏のなかで最も多い。
- ❑ 通常の訪問診療で連携しているヘルパーの人数が連携している職種の人数の19%の割合を占め、他の医療圏に比べて多い。
- ❑ 積雪期に「交通環境が悪化して訪問先へ到着できる時間の予測がつかない」と回答した割合が他の医療圏に比べて高く、「特になし」と回答した医療機関が少ない。
- ❑ 他の医療圏に比べて、平均的な移動時間を大幅に超える移動時間をかけて訪問している医療機関が多い。